
新 刊 紹 介

編集委員会

□『北海道の草花』. 梅沢俊 (著), B5 判. 400頁. 2018年6月30日. 北海道新聞社. 3,600円+税

本書は著者の既刊『新北海道の花』(2007)のAPGシステム対応版であり、その記載順序は2016年に発表された最新のAPGIVに準拠した「改訂新版日本の野生植物」(2015-2017)平凡社全5巻に全面的に拠っている。

本図鑑に収録されている植物は、北海道に自生している野生植物を主とし、それに一部の帰化植物を加えている。本書は書名のとおり大型木本類とシダ類を取り上げていないが、シダ類は著者の別書「北海道のシダ入門図鑑」(2015)がある。

平凡社の改訂新版では、掲載する各科や属はその研究者の分担執筆となっていて、各執筆者の見解が反映されているようであり、これらの見解が本図鑑にもそのまま反映される結果となっている。また、本図鑑のページ数の制約からであろうが平凡社版が北海道産とする掲載種の多くが本書で未掲載となっている一方で、本書に掲載の北海道産植物で平凡社改訂新版に未収録のものが見受けられる。

本書では約1,950種(亜種・変種・品種を含む)を収録しているが、各種につき科名、和名、学名、解説文、写真がセットとなっている。写真は全体写真、部分拡大写真数枚と写真からの引き出し線を多用した説明があり、視覚的な見分けの一助として有効である。

本書はB5判、400ページと旧版に比べて情報量が多いため大きく重くなっているの

で、野外での携行にはあまり向いていない。和名はAPGでも変更がないので、旧版『新北海道の花』(2007)は携帯に便利であり、新旧版を併せて利用できる。

科の配列や学名も平凡社新版と一部異なるものも散見される。しかし分類学的な厳密さは類書に拠ればよいことであろう。何れにしても北海道を代表する植物図鑑であることに変わりがないことを申し添えておく。

□『新しい植物分類体系 APG でみる日本の植物』. 伊藤元己・井鷲裕司 (著), A5 判. 176頁. 2018年6月30日. 文一総合出版. 2,400円+税

本書の出版社の広告文は次のとおりである。

「21世紀に入ってから出版された図鑑に採用され、熱心な野生植物ファンをまどわしている「APG分類体系」っていったい何? なぜこんなことになったのか、どんなふうに変ったのか? 分類学、系統学の専門家がすっきり解説。巻末には便利な新旧対照表を収録。」

確かに筆者も戸惑っている者のひとりであるが、本書を読むことによりAPG体系の本質を垣間見ることができたような気がしている。専門家である著者は植物に関心のある一般読者も理解できるような平易な文章を用いるとともに、関連する項目ごとに系統図や植物の写真を多用して視覚的にも理解を助ける工夫をしている。

第1章で植物の分類の基本的な認識から説き始め、つぎの第2章は変更のあった多くの科について旧体系からどのように変わったのかを著者の率直な思いも込めて書いている。科内の属の多くが他の科に移動したり、他科の属が移動してきて大きな科となったもの、独立して新科となったものなど、各科別に説明されている。

第3章は植物が進化してきた道すじを表わす系統を認識するうえで重要な分類階級であり科の上位である目レベルの解説が続く。種・属・科・目・綱などといった分類階級は祖先を共有する単位で入れ子式に纏められている。種や属レベルであればそれらの形質から共通祖先から分かれたものであろうと推察できることが多いが、目レベルとなると構成する各科の外部形態が大きく異なることが多くなり、系統関係を推測したり理解することが難しくなり、多くの植物愛好家は目レベルをあまり意識していないのが実情であろう。しかしAPGは目レベルの系統進化関係を重要視する体系であり、DNA系統解析による系統樹を公表して目から科へと植物の進化を辿るうえでの指標を示している。

第4章では系統樹の使い方として植物の進化に係わる具体例を示しながら、系統樹上ではどのように現されているかを解説している。

巻末には、エングラール分類体系各科の各属がAPGの何科に属するかを一覧で引ける対照表が用意されているので便利である。

本書の目次

第一章 植物図鑑の配列が変わった!

第二章 APG分類体系で変わった!被子植物の科

第三章 APG分類体系の目で見える植物進化

1)「目」という分類階級、2)単子葉植物の目、3)真正双子葉植物の目、4)中核真正双子葉植物の目

第四章 APG系統樹を使ってみよう

付録:APG分類体系と新エングラール体系の科の対照表

□『ヴィジュアル版 世界植物探検の歴史

地球を駆けたプラント・ハンターたち』. キャロリン・フライ (著), 甲斐理恵子 (訳), B5判, 168頁, 2018年7月30日, 原書房, 3,200円+税

本書は2009年にAndre Deutsch社から「Kew 250th The Plant Hunters」として出版されていたものの翻訳版であるが、図版のレイアウトはかなり変更されている。

著者のキャロリン・フライは英国の王立地理学会刊行の「Geographical」の元編集者であり、原書房が2015年に出した「キューガーデンの植物誌」(本誌33号で紹介)の共著者である。訳者の甲斐氏は北大出身である。

本書のカラー図版の殆どはキューガーデン所蔵のものが用いられており、多くの歴史的資料の一部も紹介されていて興味深い。著者のこれまでのキューガーデンとの係わりのせいか、キューに関連する内容も取り上げられている。

内容は、古代から現代まで「植物」がいかに発見・採集され、新たな土地に移されて人々にどのような影響を与え、歴史を形成してきたかを多くの図版を用いビジュアルに解説している。また、類書にはあまり見られないエピソードも多く取り上げている。